やはり一色いろはの青春ラブコメはまちがっている。

yayoi3

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作再構成。もし一色いろはが奉仕部に初期からいたら。一色の設定にかなり改変が入っています。

目　次

こうして彼女らのまちがった青春が始まる。――――――――1
まず間違いなく、奉仕部女子は容赦しない。――――――――20
きっと、負けたくないのは彼女だけではない。――――――――51

こうして彼女らのまちがった青春が始まる。

『部活動。それは学校に強く根付いてしまった悪しき風習である。

本来部活動とは教育活動として定義されていないものだ。する必要がないものを、教師自ら行っている。言うなればサービス残業だ。土日に遠征を行ったとしたら、その手当の額は下手をすれば交通費にすらならない。

当然教師自ら行っているというのは建前だ。近年臨任教員の増加により正規教員の負担は増えている。部活動顧問ならば運動部と文化部両方任されることも珍しくない。

もちろん、こういった現状は近年発生したものではない。昔から教師という職業はそういうものだとされ、教師をやりたい人間は掃いて捨てるほどいるから改善されていないだけなのだ。しかし、ブラック企業も真っ青の労働形態が横行している中、まともな教育が可能なのか疑問は残る。

結論。教育現場の負担軽減のために部活動は外部にアウトソーシングするべきである。青春を求めるならばそれは学外で行われるべきであり、学内に持ち込むのは害悪でしかない。部活動強制入部の学校は速やかにその制度を廃止し悔い改め、帰宅部を推奨するべきである。』

「で、なんだねこのふざけた内容の作文は」
国語教師の平塚静は額に青筋を立てながら、俺の眼前に作文用紙を突き付けた。
平塚先生は組んでいた腕を解き、右手の中指を上下に叩く。
とんとんと。
絶え間なく聞こえるその音は私は機嫌が悪いですと強く主張していた。
「いえ、真面目に書いたのですが」
「内容に関して深く言及はしない。しかしだ。これでは高校生活の一年を振り返って、という内容にはあまりに即していないだろう。……体調でも悪いのか？」
「自分の高校生活の一年を振り返ったら、あまりに何もなさすぎて。で、仕方がないので一般的な高校生活はどんなものかとしばらく考えていたんですよ。高校生活といえば世間一般では青春真っ盛りとかしばしば言うじゃないですか。じゃあ青春ってなんだろうと考えたとき、分かり易いのは部活かなと。でも俺部活動に入ってないのでとりあえず帰宅部を美化しようと」
「もういい……体調が悪いんだな。再提出は明日以降でいいから今日は早めに帰って寝ると良い」
本気で心配されてしまった。

少し罪悪感を覚えなくもないが、何一つ嘘は言っていないので仕方がない。
「体調の方は問題ないです。ただ、今すぐ再提出はきついので勘弁してください」
「それは別にかまわないが……本当か？」
疑わしげにそう言った平塚先生は、すっとこちらの額に手を伸ばしてきた。
「うむ……熱はないようだな。血色も良い。これなら問題はないか」
組んだ腕に豊満な胸をのせ、うんうんと頷く。
視線が引き寄せられそうになるのを我慢して視線を上げると、平塚先生と目が合った。
じーっと、こちらの考えを見透かすかのように見つめ続けてくる。
うっかり嫁にもらってしまいそうになるからやめてくれませんかね。
「ならいいが。そうだ、こんなふざけた作文を書いた比企谷には罰が必要だな」
「あ、俺体調悪いんで今日は帰」
「ついてきたまえ」
俺の反論を遮って、先に進んでしまう。
ここで待機していたらどんな反応をするだろうか。
少し考えたが、命がまだ惜しかったので渋々ついて行くことにした。
到着したのは特別棟の一室だった。

どうやら正体不明の部活の部室に連れてこられたらしい。
「平塚先生、俺の作文ちゃんと読んでました？」
「もちろんだとも。部活動で青春をしたいんだろう？」
「……そんなことは一言も書いてないんですが」
むしろ先生の負担を考慮した上で帰宅部に入部すべきだと書いたつもりだったのだが。
その後もなんだかんだ理由を付けて、ふざけた作文を書いた罰として強制的に入部させられた。
部活の名は奉仕部。
ふざけた名前だ。
そしてどことなくエロい響きを持っている。
かといって放課後にあはんうふんな展開が待っている訳ではなく。
奉仕部の奉仕とは要するにボランティアのことである。
また奉仕部の理念として、飢えた人に魚を取ってあげるのではなく、魚の取り方を教えてあげるのだという。
あくまで我々が行うのは手助けであり、解決するのは依頼人本人の仕事だ。
幸いにして、奉仕部は意識高い系の部活ではなかった。

基本的に依頼がくるまで部室で待機している。
その間の部員の行動は自由である。
放課後、静かな部室で本を読むのも悪くなかった。
むしろ居心地は良い方だ。
さすがに自宅には劣るのだが。
奉仕部の部員は現在のところ俺を含めて3人だ。
まずは雪ノ下雪乃。
奉仕部の部長である。
腰まで届く綺麗な黒髪に、整った顔立ちに整ったプロポーションを持つ。
整いすぎて一部の起伏が足りないのが玉に瑕か。
友達はいない。
もう一人は奉仕部初の依頼人、由比ヶ浜結衣だ。
先日、クッキーを作りたいという依頼を隠れ蓑に殺人級ダークマターを製造したフリーの暗殺者である。
明るい色に染めたショートカットの髪に、ボタンを一つ余分に開けた胸元、そして短めのスカート。
外観から察することができるようにビッチだ。

マジな話のできる友達はいない。
そして俺、比企谷八幡。
ＤＨＡ豊富そうな目をしたプロぼっちだ。
当然友達はいない。
今日も今日とて依頼者が来ることもなく、平穏に読書をするだけの一日が過ぎると思っていた。
しかしそんな淡い幻想も、部室のドアが数回ノックされたことにより崩れ去ってしまった。
平塚先生はノックをした試しがないので、恐らく外部の人間だろう。
奉仕部に入部してからまだ一週間に満たないというのに、こうも立て続けに依頼がくるとは。
ほとんど存在を知られていない奉仕部にここまで依頼人がくるのだ。
もしかしたらこの学校の生徒は悩みが多いのかもしれない。
現に俺も働きたくないのに働かされるという悩みを抱えている。
「どうぞ」
「失礼しまーす……」
平塚先生がノックを覚えたという僅かな可能性にかけたが、外れた。

ドアから顔を覗かせた生徒に見覚えはない。
十中八九、依頼人だろう。
「平塚先生の紹介かしら？」
「あ、いえ……。そういう訳ではないんですけど」
雪ノ下の視線が由比ヶ浜に移る。
平塚先生の紹介でないのなら、由比ヶ浜経由で来た可能性が高い。
ちなみに俺の知り合いがくる可能性は０であるので当然スルーされた。
「えへへ……」
「……」
視線を受け、由比ヶ浜は照れたように笑う。
雪ノ下が求めていた反応とは違うが、由比ヶ浜の知り合いでないということは確認できたので良しとしよう。
「おい。依頼人が入口で困ってるぞ」
なんか二人してゆるゆりな雰囲気を作り出しそうになっていたので、助け船を出した。
はっとした雪ノ下は女生徒に席に座るように促す。
椅子に座った女生徒は、とても目立つ容姿をしていた。

肩まで伸ばした亜麻色の髪。
これは染めているのだろうか。
質感からは、あまり不自然な感覚は得られない。
全体的に整った顔立ちに化粧はほどよく、うっすらとかかっている。
高すぎない身長に、潤んだ大きな瞳。
そして小さな手を袖に半分だけ隠して、こちらを上目遣いに見つめてくる。
なるほど。
彼女は自分の利点を理解し、最大限に活用している。
これは男子からの受けもいいだろうな。
女子にはすごく嫌われてそうだ。
そんなことを考えていると彼女はこちらの考えなど見透かしたかのように瞳をじっと見つめてきた。
心なしか、少しだけ頬が膨らんでいる気もする。
実にあざとい。
慌てて目を逸らしても、彼女の視線はずっと俺に注がれたままだった。
「とりあえず、初めましてでいいかしら？　私は雪ノ下雪乃。奉仕部の部長をしているわ」

「えっと……はじめまして。私、1年の一色いろはって言います」
雪ノ下は慈愛に満ちた笑顔で俺に手のひらを向けた。
「それで、このぬぼーっとしたのはヒキガエル君といって」
「お前何で俺の小学生の時のあだ名知ってんの？　比企谷な」
「あら、ごめんなさい。見ての通り独特な感性を持っているわ」
「いやそれ見て分かんないよね」
説明が回りくどいのはあれか、ぼっちっていうと自分にも跳ね返ってくるからか。
そんなことを考えていると唐突に雪ノ下はこちらをキッと睨んできた。
先に振ってきたのはそっちですよね？
いやなんでもないですごめんなさい。
「まーまー。ヒッキーもゆきのんも抑えて抑えて。あ、あたしは部員の由比ヶ浜結衣っていいます」
「ちょっと待って。由比ヶ浜さんは部員ではないわ」
「そうなの!?」
「……」
てっきりなんだかんだイベントをこなしていつの間にかＰＴに加入しているあれかと思ったんだが。

「だって由比ヶ浜さんは入部届を出していないもの」
「書くよ！　入部届なら何枚でも書くよ！」
「枚数は一枚でいいのだけれど」
　じゃあ俺も入部届出してないから部員じゃないって事になるのか。
「比企谷君は平塚先生から直接入部するように言われているから部員よ。安心して良いわ」
「お前そうやって人の考えをちょくちょく見透かすのやめてくんない？　怖いんですけど」
「あなたが特別顔に出やすいだけよ」
「……まあいいけど。とりあえず一色さんは奉仕部に依頼があってここにきたんだよな？　依頼の内容を聞いても良いか？」
「はい」
　居心地の悪さをごまかすように話を進める。
　当然ながら彼女としてもそれは歓迎するべき事だったのだろう。
　視線が外れてホッとするのも束の間、油断したところで再び目線があった。
　今度は外れない。
　外せなかった。

「今日ここにきたのは、相談したいことがあったからです」
「……」
「……言いにくいことなら」
「あはは。まあ女の子同士でしか話せないこともあるしね」
神妙な面持ちで彼女が『相談』を切り出した瞬間、二人の視線が俺の後頭部を突き刺す。
いくらクラスで孤立しているからといっても、俺もそこまで空気が読めない訳じゃない。
無言で椅子から立ち上がり、出口へと向かおうとしたところで、
「……お？」
制服の裾を握り、相も変わらず視線を注ぎ続ける彼女がいた。
視線が熱い。
そろそろ俺の蝋燭のようなハートは溶けてなくなってしまいそうだぜ。
「せんぱい、待ってください」
……やっぱり空気読めてなかったのん？
まさかの待機命令に一瞬だけ硬直して、視線で理由を求める。
「せんぱいは居てください。というか、居てくれないと意味がないです」

若干の上目遣いで、けれど先ほどまでとは違う、あざとさのない真剣な表情だ。
この時初めて、俺は彼女を見たのだろう。
そしてーー。
「おお、分かった。分かったから離してくれ。このままだと通報される。ーー俺が」
しばらくの間見つめ合っていると（大変不本意だろうが端からはそう見える）携帯を取り出し今にも警察を呼びそうな雰囲気の二人が視界に入った。
「待て。俺はまだ何もしていない」
「まだ？　ということはこれから何かをするというということかしら？」
「そんなことはない。というか、本題から逸れているぞ」
「……そうね、ごめんなさい。少し騒がしかったわね」
「全然そんなことないですよ。むしろ緊張が解れました」
意を決したようで、彼女は口を開いた。
「私、今好きな人がいるんです」
瞳を伏せ、頬を少し染めて彼女はそんな告白をした。
それを聞いて、由比ヶ浜は口を「O」の形に開けて馬鹿みたいにそのまま「おー」と呟いている。
雪ノ下は相変わらずの無表情だ。

少し頬に赤みが差しているような気もしなくもないが、まあ気のせいだろう。
現に俺の視線に気付くとこちらに鋭い視線を返して少し赤くなっていた。
結局赤いのかよ。
「一色さん。あなたに好きな人がいるということは分かったわ。その上であなたはどうしたいのかしら？　もし単純な恋愛相談なら、私たちではあまり力になれないと思うのだけれど」
それもそうだ。
雪ノ下や俺は論外だし、由比ヶ浜も意外とそういう経験はなさそうだった。
「いえ、恋愛相談ではないんです。ただ見ていてほしいんです」
「？　勇気が足りないから応援して欲しい、ということかしら？」
「いえ、応援はしなくても良いです。むしろ……」
言い淀んだ彼女は一瞬だけ由比ヶ浜に視線を向けた。
由比ヶ浜は何故か表情を強張らせて、「まさか……」と呟いた。
「私が好きになったのは……」
一色の視線が再び俺を捉える。
途端に、けたたましい警鐘が脳内に鳴り響く。
〝そんなこと〟あり得るはずがないのに、何故か一刻も早くここから離れるべきだと

本能が告げている。
でなければ、俺のポリシーを根幹から揺るがすような何かが起きるぞ、と。
「せんぱいです」
まっすぐに、俺を見つめたまま告げられたその言葉は室内の空気を瞬間的に凍らせた。
水をゆっくりと冷却していって０度以下にして振動を与えて一気に凍らせるあれが頭の中に思い浮かぶ。
固まった部屋の空気は溶けることなく、発言した本人以外を文字通り凍り付かせた。
誰も言葉を発しないし、動きもしない。
重い沈黙を破ったのは雪ノ下だった。
それ以前に少し不思議そうな表情で首を傾げ、俺たちの表情を見て手を振っていた一色は除く。
雪ノ下はこめかみを押さえつつ、
「状況を整理しましょう。一色さんは奉仕部に依頼に来た。依頼内容は……比企谷君を逃がさないようにする、といったところかしら」
「いやいやいやいや。え、何これ？　何なのこの状況」
「とても信じられないのだけれど、どうやら告白されたようね。先輩？」

「それじゃ雪ノ下か由比ヶ浜、もしくは他の上級生を呼んでるかもしれないだろ」
状況証拠はそろっている。
けれど本当に訳の分からなかった俺は無駄な抵抗をした。
せざるを得なかった。
「せんぱいはせんぱいですよ?」
「いや、だからちゃんと名前で言わないと誰のことを言っているのか」
そう言ってしまってから失言だったと気付く。
一色は瞳を潤ませ、恨めしそうにしながら告げる。
「……比企谷、八幡、せんぱいです」
「……」
「総武高校2年F組、比企谷八幡せんぱいです」
彼女は怒ったような、けれど少し照れたような声で俺の名を呼ぶ。
名前と苗字とせんぱいとを分け、一言一言、愛おしそうに。
彼女の優しい声に、魂が震えた。
人に好きと言ってもらえたのは家族以外では初めてかもしれない。
悪戯でも何でもなく、真剣にそう言ってくれているのだということが分かる。
なので俺も真剣に答えることにした。

「ごめんなさい」
頭をほぼ直角まで下げて、彼女の告白に返答する。
三方向から理由を求める視線が突き刺さる。
「いやだってお互いのこと全然知らないのに付き合うとかあり得ないですしそういうのは親密度あげてイベントＣＧ全回収してベストエンド一歩手前になってからにしてくださいごめんなさい」
「ヒッキー何言ってんのか分かんなくてすごく気持ち悪い」
「やめて？　俺も自分で言っといてこれどうなのって思ったけどキモいより気持ち悪いの方がマジっぽくて傷つくからやめて？」
「比企谷君。由比ヶ浜さんはマジっぽく、ではなく真剣に言っていると思うのだけれど」
「うぐっ」
実際に意味が分からなかった。
好きと言われても、俺のどこを好きなのかこれっぽっちも理解できないのである。
告白される理由が分からない。
容姿はまあ、腐った目にさえ目を瞑れば見れなくもないが取り立てて優れているというわけではない。
というか中学生以降、業務連絡以外で女子と関わった機会が皆無まである。

「いたずら、という線はなさそうね」
雪ノ下は軽くため息を吐いてから、すっと目線を上げた。
どこか諦観を滲ませるその表情から、次に何を言うのかは容易に予想がついて。
「いいでしょう。この依頼、引き受けるわ」
「……おい」
「えぇっ!?」
「私たちは手助けをする。あくまでそれだけよ」
「その、手助けっていっても具体的にどうするの？」
由比ヶ浜が疑問の声を上げる。
「そうね。一色さん、あなた奉仕部に入部する気はないかしら？」
「ふぇ？」
声だけ聞くと実にあざといが、本当に予想外のことだったのだろう。
ぽかんと口を大きく開けたその表情はまぬけそのものである。
「嫌だったら、いいのだけれど」
「い、いえっ！　そんなことないです。ぜひぜひ、入部させてください！」
「いやちょっと待て」
「あら比企谷君。あなたに新入部員の入部を拒否する権利があるのかしら？」

「……ないな。ないですね」
「なら、問題はないでしょう？」
そんな権利どこにもなかったわ。
というか俺がそもそも数日前に入部したばかりの新入部員だし。
由比ヶ浜結衣に至っては入部は数分前だ。
その時に何も言わなかった時点で部員として口出すのも筋が通らない。
「一色さんには奉仕部として活動してもらうわ。その過程でお互いを知り合う。もし途中で〝合わない〟と思ったのなら、ここを離れるなり、好きにすればいいわ」
「俺の意思は……」
「あなたにも言っているのよ？」
「はひ？」
「あなたが言ったんじゃない。お互い良く知らないのに付き合うことはできないって。これが好きな人がいるからとか生理的に無理という理由だったのなら、一色さんには悪いのだけれど、お引き取り願っているわ」
「そ、そうだったのか」
意外。
ちゃんと俺にも人権が残ってたのね。

「つまり、俺が合わないと思った場合、出ていくのは俺か？」
「それも、お好きに。自分の意志で出ていく分には構わないけれど、相手を追い出すようなことはないようにしてちょうだい。平塚先生に引き留められたら私から言っておくわ」
なるほど。
それならば合法的に放課後の労働を拒否した上で帰宅部に戻れるということか。
俺に元々拒否権はないが、メリットはあり、後腐れは残らない。
「……分かったよ」
一色は俺の発言を聞くと、ぱあっと表情を輝かせる。
「はい、よろしくお願いしますね？　せんぱい！」

まず間違いなく、奉仕部女子は容赦しない。

重い足取りで部室へ向かう。

ここでサボろうものなら、平塚先生からどんな罰を受けるか分かったものではない。

部室のドアを開けると、すでに雪ノ下と一色が椅子に座って何事かを話していた。

俺が入った瞬間にぴたりと会話が止んだので少し気になったが、詮索することもないだろう。

俺はいつも通り挨拶をし、右端の定位置に座って本を取り出す。

ちなみに一色の席は右側に置かれている。

つまり俺の定位置のすぐそばである訳だが……。

「やっはろー！」

由比ヶ浜が間に座ると、不自然さがなくなる。

絶妙な距離感が保たれていた。

一色いろはに告白されてからというもの、どんな風に放課後を過ごせばいいのか不安だったのだが。

「……」

ぺらりと。

本のページをめくる音だけが部室内に響く。

時折由比ヶ浜が携帯を操作する音が聞こえてくるが、それ以外はもっぱら静かなものだった。

肝心の一色はというと……。

「……」

ただ静かに読書していた。

ラノベである。

当然だが、俺の貸したものだ。

1時間ほど前のこと。

依頼人も居らず暇だったので、俺はいつも通り奉仕部の部室で読書をしていた。

そうして一冊読み終えた直後、ふいに視線を感じた。

じーっと。

こちらに視線を送っていたのは一色だった。

ちらりと視線を返すと、一色は瞬時に目を逸らす。

手元の二冊目の本に視線を戻すと、再び視線を感じて顔を上げ。

かれこれ数分ほど、同じような動作を繰り返していた。
途中からちょっと面白くなってきて止め時を見失ったが、このままでは話が進まない。
少し名残惜しいが、一色に話しかけることにした。
「……読むか？」
「え、いいんですか!?」
大袈裟に驚く一色。
ここで理由を聞くほど野暮ではない。
俺は無言で手元の本を一色に手渡し、反応を待った。
「わー、ありがとうございます！　せんぱいがどんな本を読んでいるのか気になっていたんです」
「ただのラノベだぞ？　合わなかったら無理して読まなくていいからな？」
といいつつ、一色が本を受け取ったのを見てほっとする。
なんだかんだいって、自分の好きな本を読んでもらえるのは嬉しかったりする。
ただ、落ち着かない。
告白までしたというのに、その隣にいるのは平気なのだろうか。
緊張したりしないのだろうか。

また初日が初日だけに、もっとぐいぐいアピールしてくるのかと思って身構えていた。

そのせいか、この静けさが余計に心臓を締め付けてくる。

「紅茶でもいれましょうか」

雪ノ下が席を立ち、紅茶を淹れる。

その間は少し緊張がほぐれたが、すっかり紅茶が冷めてしまった頃には元の静かな空気に。

手元の本に目を通すが、本の内容は全く頭に入ってこなかった。

おかしい。

こんなはずではなかったのに。

平穏な放課後は一体どこに行ってしまったのだろうか。

まあ、それもそうか。

別に彼氏彼女の関係になった訳ではないのだ。

むしろお互いを知るということが目的なのに、急にベタベタされ始めたら困る。

だから特に意識したりはせず、普通でいればいいのだ。

「……」

まあ、それが出来たら苦労はしないんですけどね。

相変わらず頭に入ってこない文字列を流し読みながら、読書に集中している一色を少しうらめしく思いつつ、時間だけがのんびりと過ぎていく。
部活終了の下校時刻間際になって、一色はようやく本を閉じた。
どうやらこの短い時間で全て読んでしまったようだ。
随分と早いが、内容はきちんと読み取れているのだろうか？
「せんぱい、ありがとうございました」
「……それ、読んで面白かったか？」
聞くのは少し怖かったが、聞かないままで何の感想もないとそれはそれで怖いのでさりげなく聞いてみた。
声が少し上擦ってしまったのは気にしない方向で。
「うーん」
一色は少し唸って考えた後、
「あんまりよく分かんなかったです！」
「お、おう。そうか」
「最後の方で主人公が何かすごいことをしたのは分かるんですけど、どうしてそうなったのかとかが良く分からなくて。作中の説明もうまく理解できなかったです」
「ああ、それはな……このページに伏線があって」

しばらく一色に本の内容を解説する。

『ほー』とか『へー』とか、適当に相槌を打っているだけかと思ったが、その後に聞いてみると意外と理解していて驚いた。

「また読ませてもらってもいいですか？」

「それは別にかまわんが……無理して読んでないか？」

「へ？　どうしてですか？」

「なんというか。少なくとも女子向けじゃないだろ」

「そうかもしれないですね。ただ……」

「ただ？」

「せんぱいのことはきちんと知っておきたいんです」

「……」

「好きな人のことを知りたい。好きな人の好きなものを知りたい。同じものを好きになれるとは限らないですけど、好きになれたら素敵だと思いませんか？」

「……そ、そうかもな。まあ、次は女子でも読みやすいようなやつ持ってくるわ」

「あ、ありがとうございます」

前言撤回。

一色いろはは、こと恋愛に関して容赦するつもりはないらしい。

そんな日の翌日。
いつも通り放課後に部室へ向かうと、そこには入口で突っ立っている3人の姿があった。
「……何してんだお前ら」
「ひゃい！　な、なんだヒッキーかぁ」
「……せんぱい、驚かさないでくださいよ」
「別に普通に話しかけただけなんだがな」
ちなみに雪ノ下は声こそ出さなかったが肩をビクッと震わせていた。
これまで絶対許さないノートに項目が増えるだけだったが、今日の反応を見て少し溜飲が下がった。
次からは『絶対に許さない』にする基準を下げてやってもいいかもしれない。
「で、何してんの？」
「部室に不審人物がいんの」
「ちなみに5分以内にせんぱいが来てくれなかったら警察に連絡しようかと思ってました」
「……」

「冗談ですよ?」
「お前のはなんか、冗談に聞こえないわ……」
3人に促されるまま、慎重に扉を開け中に入る。
するとそこには不審人物がいた。
「ふはははは……まさかこんなところで出会うとはな」
窓を開けていたためか、扉を開けた瞬間一陣の風が吹き、プリントを周囲に撒きちらす。
誰が片付けるんだこれ。
「待ちわびたぞ比企谷はちま、ん……?」
「あなたの名前を呼んでいるけど……知り合い?」
「知らん。あんなやつは知ってても知らん」
「ま、まさかこの相棒の顔を、忘れるとは、な……見下げ果てたぞ、はちまぇん」
なんか声が裏返って複数形になってる。
「せんぱい、せんぱい。この人誰ですか。不審者ですか。通報しますか」
「だから冗談に聞こえないっつぅの……」
ちなみに最後の二言は小声で耳打ちしてきたので、材木座には聞こえていない。
「わ、我は剣豪将軍、材木座義輝……です」

どうしたんだこいつ。

いつもの騒がしさが嘘であるかのように鳴りを潜めている。

そして材木座がチラチラと視線を送っている先を見て、材木座の心情を理解した。

「なるほど。女子が3人もいるから委縮してんのか」

「何それ」

「……どういうことかしら」

「いや、言葉通りの意味だけどな」

「言いたいことはまあ分かりますけど、それだと日常生活に支障をきたしませんか？」

「まあお前らは割と綺麗どころだからな。目の前にいたら緊張すんのも無理ないだろ」

「き、きれいって……」

「せんぱい……」

「いや、一般論だからね」

目を潤ませて頬を染める一色は実にあざとい。

口元が若干歪んでいるので、狙っているというのは十分わかるのだが、普通にかわいいのが納得いかない。

このまま一色を見つめていると血迷ってしまいそうだったので、材木座に視線を戻す。

「で、お前何しに来たの？」
「無論、かつてのように再び天下を」
「いやそういうのいいから。ふざけるならここに残して俺は帰るぞ」
「すたーっぷ！　いやマジ待って。ホントに。お願いします」
半分冗談で背を向けると、割とガチなトーンで引き止められる。
材木座の涙目とか誰得だよ。
「ちょっと、何なのあれ」
そんなこんなで材木座をいじって遊んでいると、雪ノ下が耳打ちしてきた。
いきなりだったので返答に窮し、固まってしまう。
「あれは中二病ですよ……というか近いです離れてください」
ものっそい不機嫌そうな声で一色がそう言って、雪ノ下との間に割って入った。
表情は笑顔だったが、声と目が笑っていない。
こわい、です。
雪ノ下はほぼ無意識だったのだろう。
一色の行動に、困惑していた。
対して、不思議そうな顔をしているのは由比ヶ浜だ。
「ちゅうにびょう？　病気なの？」

「精神疾患ではありません。むしろ私は同一性拡散を避けるための防衛機構であると認識しています」
「なるほど」
「意味分かんない……」
安心しろ由比ヶ浜。
今の説明で分かる雪ノ下の方がおかしい。
「例えばだ、由比ヶ浜。因数分解が将来何の役に立つんだとか先生に言ったこと無いか？」
「は？　そんなの言ったら余計せんせーがめんどくさくなるだけじゃん。ヒッキーバカなの？」
「……」
こいつに馬鹿って言われると無性に腹が立つな……。
「大体わかったわ。あなたの依頼はその心の病を治すってことでいいのかしら」
「いえ、それは違うと思います」
一色は床に散らばっていた紙束を拾いながらそう言った。
ひらひらとたなびく紙束には、細かい文字がびっしりと書き込まれていた。
そこでようやくそれの正体に気付く。

「これ……小説の原稿か？」
「しかり！」
「と言うことは依頼内容は」
「とある新人賞に応募しようと思っているが、友達がいないので感想が聞けぬ。読んでくれ」
　ということらしい。
　雪ノ下のため息や由比ヶ浜の椅子を引く音だけが部室内に響く。
　そんな中、一人だけ無駄に元気なのがいた。
「……なんでお前そんな乗り気なの？」
「奉仕部としての初の依頼ですからね。がんばりますよ！」
「そうか……まあがんばれよ」
「はい！」
　まあ、奉仕部の依頼である以上、俺もやるんですけどね。
「投稿サイトとかあるから、そこに晒せばいいんじゃないか？」
「それは無理だ。あやつらは容赦がないからな。酷評されたら死ぬぞ、我」
「心弱ぇ。でもなぁ、たぶん投稿サイトより、こいつらの方が容赦ないよ？」

そのまた翌日。

眠い目を擦りながら部室に向かうと、仲良くうたた寝をしている雪ノ下と一色がいた。

どうでもいいがこの二人はいつも俺より先にきている。

特に寄り道をしていたり、ＨＲが長いわけではないのだが。

とりあえず、雪ノ下に声をかける。

「お疲れさん」

「ん……。驚いた、あなたの顔を見ると一発で目が覚めるのね」

「そりゃようございました。目覚めたついでに一色も起こしてもらえるか？」

「……嫌よ。あなたが起こせばいいじゃない」

「……何不機嫌になってんだよ。俺が起こしたら何かいろいろ言われちゃいそうだろ」

「もう遅いみたいだけれど」

そうして一色の方を向くと、目を覚ました一色とぴったりと目が合う。

それから数秒間は何の反応もないまま、やがて眼の焦点が合っていく。

数回ぱちぱちと瞬きをしたあと、開かれた眼がさらに大きく丸くなった。

「せ、せんぱい!?　もしかして寝顔、見ました？」

「……まあ、すまん」

「ひゃあああ……」

一色は顔を下に向け、しばらくの間悶えていた。

『え、メイク大丈夫かな？　よだれとか垂れてたりしないよね？』とか小声で言っているのは全部聞こえてるからね？

そもそもそんなに厚く化粧なんてしていないし、特に普段との違いは見られなかったが、それを言うとまたややこしいことになるんだろうな。

やがて、涙目になった顔をあげ、じとっとした目でこちらを見てくる。

「これはもう責任を取ってもらうしか……」

「ちょっと待って。それだと私も責任を取ってもらわなくてはならないことになるわ。訂正してもらえるかしら」

「うぅ……ちょっとお手洗い行ってきます！」

「あ、一色さん！」

何故か慌てている雪ノ下。

これは珍しいものを見れたかもしれない。

「……私も気にした方がいいのかしら」

「別に変なところはなかったから、いいんじゃねーの」

「……なるほど。こうして改めて言われると案外恥ずかしいものね。今後は私も気を付

けることにするわ」
「さいですか」
「やっはろー」
そして、一色と入れ替わるように由比ヶ浜が部室に入ってきた。
あれ、なんかいつもとトーンが違くないですか？
「ヒッキー」
「ひゃい!?」
「いろはちゃんに何したの？」
由比ヶ浜は腹の底から出ていそうな低い声で問い詰めてくる。
「さっきいろはちゃんが泣きながら走り去っていったけど、ヒッキー何したの？」
「待て、俺は何もしてない」
「泣かせたのに？」
「誤解だ。話を聞」
「ゆきのんもちょっと涙ぐんでるし、顔赤いし」
雪ノ下はぷい、と顔を逸らした。
この件に関して雪ノ下の助力は得られないだろう。
瞳のハイライトが消えていく由比ヶ浜にどう言い訳しようか考えていると、奉仕部の

扉がノックされた。
「頼もう！」
これほど材木座が頼もしく見えたのは初めてかもしれない。
しかし、やけに自信にあふれた表情だ。
この後に起こるであろう地獄をまるで想定していないのだろう。
「一色、遅いな」
「依頼人も来てしまったことだし、始めましょうか」
「では感想を聞かせてもらおうか」
「ごめんなさい。私にはこういうの良く分からないのだけれど」
「構わぬ！　凡俗の意見も聞いておきたいところだったのでな。好きに言ってくれたまへ」
そう、と。
短く前置きをしてから、雪ノ下は処刑を開始した。
「つまらなかった。読むのが苦痛ですらあったわ。想像を絶するつまらなさ」
「ぐふぅ！　……さ、参考までにどの辺がつまらなかったのか、ご教示願えるかな」
「まず、文法がめちゃくちゃね。何故いつも倒置法なの？　てにをはの使い方知ってる？　小学校で習わなかった？」

「それは平易な文体でより読者に親しみを……」
「それは最低限まともな日本語が書けるようになってからやるべきことではないの？」
　ごもっともで。
　材木座は絶句して何も反応を返せないようだ。
「それにルビだけど、誤用が多すぎるわ。能力に”ちから”なんて読み方はないのだけれど。聞くけど、この『幻紅刃閃』――ブラッティナイトメアスラッシャーのナイトメアはどこから来たの？」
「げっふー！　ちがうのだ……！　最近のバトルではルビの振り方に特徴を」
「ここでヒロインが服を脱いだのは何故？　必要性が皆無よね。しらけるわ」
「ぐひぃー！　そういう要素がないとぉ！」
「完結していない物語を人に読ませないでくれるかしら？　文才の前に常識を身に付けた方がいいわね」
「ぴゃあああ……！」
　材木座は床に崩れ落ちた。
　あはれなり。
「その辺でいいんじゃないか？　あまりいっぺんに言ってもあれだし」
「まだ言い足りないけど、まあいいわ。じゃあ、次は由比ヶ浜さんかしら」

「へ？　えーと……む、難しい漢字、たくさん知ってるね」
「がはぁーぅ！」
「じゃあ、ヒッキーどうぞ！」
「はちまぁん……お前なら理解できるよな？」
「で、あれってなんのパクリ？」
「ぶふぉおお！　ふぇうぅ……おほうぶふぽーとぉらだーとだただーとうふぉれぇそ……」
「あなた容赦ないわね」
「お前にゃ負けるわ」
　転がり回る材木座の肩にそっと手を差し伸べて。
「ま、大事なのはイラストだから、中身なんてあんまりきにすんなよ」
　こうして材木座にとどめを刺した瞬間、奉仕部の部室のドアが勢いよく開いた。
「ただいま戻りましたー！　……って、どうしたんですか？」
　薄目の化粧はばっちりと整えられており、制服は皺ひとつなく着こなしている。
　完璧に武装した一色がようやく帰ってきたようだ。
　材木座の反応が面白すぎて存在をすっかり忘れていた。
「おかえりなさい。一色さんが不在の間に依頼人が来てしまったので、先に感想を言い

合っていたところよ」
「なるほどです。少し出遅れてしまいましたかね？」
「まあ出遅れたというか、もう十分というか」
「ではでは、次は私の番ですね！」
なんだろう、ものすごく嫌な予感がする。
そういえばこいつ、初めての依頼だからとものすごく張り切っていたな。
あの小説の出来を見た時は、正直に言って由比ヶ浜のようにほとんど読まずにくると思っていたが……。
材木座は最後の望みとばかりに、光を戻した瞳で一色を見た。
まるで女神にでも見立てているかのようだ。
希望を持つのはやめておいた方がいいと思うんだがな。
そして一色は一度大きく息を吸うと、誰が見ても魅力的に映るような、花の咲いたような笑顔で告げた。
「文章全体がとても読み辛かったです」
ただしその花は毒を多分に含んでいたが。
「読むのが苦痛ですらありました」
「ぐ、ぐはぁ!!」

「文法がめちゃくちゃで文章の前後関係が何度か分からなくなりました。どうしていつも倒置法を使うんですか？　てにをはの使い方を間違っているのは致命的だと思います」
「お、おい一色。その辺で……」
「ルビに関しては深く突っ込みません。ただ使っている場面でことごとく滑ってますよね。自分がカッコいいと思う単語を並べておけば読んでいる人もそう思ってくれると考えているんですか？　はっきり言ってしらけます」
「ふぉふぉ……ふぉ」
「とはいえ、私が読み終えているのはまだ一章だけですので、細かい内容に言及するのはやめておきます。最後まで読めば材木座先輩がやりたかったこともある程度把握できると思いますし。この分量だと全部チェックするのにあと三日はほしいので、それまで待っていてくださいね。材木座先輩！」
「……ぁっ……あっ」
　材木座、撃沈。
　ほぼ再起不能なまでに叩きのめされた材木座を一応介抱してやる。
「あとはですね……」
「一色、止まれ。材木座のＨＰはもうゼロだ」

「えー、これからが良い所なんですが……」
「すでに雪ノ下から同じような指摘がなされた後だ。ほれ」
雪ノ下がチェックした、付箋がびっしりと貼りついた原稿を一色に見せる。
ページをめくって確認した一色は、
「そうだったんですか……雪ノ下先輩、一日で全部読んじゃったんですね」
「その代わりあなたほど丁寧に一文一文読み切れてはいないわ。チェックを入れるので精いっぱいで、添削して書き込む暇はなかったもの」
「あ、あはは……。とりあえずアレ、どうにかしない？」
由比ヶ浜が床に寝転がっている材木座を指さす。
ひゅーひゅーと虫の息を繰り返す材木座。
しかし、時間が経つと落ち着きを取り戻したのか、材木座は自分の足で立ちあがった。
「また、読んでくれるか」
思わず耳を疑った。
あれだけ言われて、まだやるというのか。
俺だったら軽く3回くらい死にそうになってるぞ。
「何言っているんですか材木座先輩」
感情の読み取れない平坦な一色の声。

それは静かな特別棟の一室にやけに鮮明に響いた。
その言葉は、材木座を筆頭に奉仕部の空気を凍りつかせた。
まずは材木座と俺、次に雪ノ下、最後に由比ヶ浜が理解した。
いや、正確には理解したつもりになっていた。
特に読んですらいない由比ヶ浜は気まずそうに目を逸らしている。
「そ、それはさすがに我の小説を読むのは二度とごめんだという、そういうことなのであろうか……？」
材木座が核心に触れる発言をして――。
「いや、本当に何を言っているんですか？　読まないと依頼が達成できないじゃないですか」
「！　で、では、また読んでくれるのか？」
「だから読むといっているじゃないですか。それより、どうして帰ろうとしているんですか？」
一色の唐突な『ただで帰れると思ってんじゃねーだろうな？』発言に材木座は怯えた。
「これだけだと私たちは、材木座先輩に『そのやり方はダメだよ』って教えただけになるじゃないですか。材木座先輩は飢えていますけど、魚の取り方は分かっています。まだ未完だそうですけど、これだけの文章を書けるんだから間違いありません。なら私たち

のやるべきことは取れた後の魚をおいしく調理する方法を一緒に考えることではないでしょうか。――結衣先輩抜きで」
「いろはちゃん、その例えはひどくない!?」
「ごめんなさい。さすがにあのダークマターを見たあとだと……」
「あたしのクッキー見たんだ!?　ひ、ヒッキー」
「いや違う。俺じゃない。誤解だ」
　というかなんで知っているんだろうね、この子。
「こ、こほん。こほん。とりあえず材木座先輩の課題として、文章を書き慣れていないことがあげられると思うんです。で、昨日考えてみたんですけど。書き慣れていないならたくさん文章を書けばいいと思うんですよ。それも、小説とは関係ない普通の文章をです」
　たしかに、あの文章で小説を書き続けても上達が見込めるとは思えない。
「ですから私は、材木座先輩に日記を書くことを提案します。その日一日起こった出来事を、できるだけ簡単な文章でまとめます。それを私たちが、誤用や読みにくい文章がないかチェックするんです」
「一色さんの言いたいことは分かったわ。でもそれだと、やりすぎにならないかしら」
　雪ノ下が疑問の声をあげる。

「手取り足取り面倒を見て。一つ一つ間違いを訂正して。そうすれば確かに彼の文章は改善されるかもしれない。けれども、それは本当に彼の力になるのかしら」

雪ノ下の意見は単純明快だ。

俺たちがサポートしすぎては、材木座のためにならないのではないか。

由比ヶ浜はクッキーの作り方を教わり、失敗しながらも自力で焼き上げた。

出来は決して褒められたものではないが、そこにはたしかに、彼女自身でどうにかしようと足掻いた軌跡があった。

「そうですね。どこまでやるかは、ちょっと難しい問題です。その前に材木座先輩はどう思いますか？」

「むむ……」

そこで材木座は一度考え込む。

「我は今回、自分で書いた小説を読んでほしくてここに来た。うっかり死んでしまいそうなくらいボロクソ言われたが、それでも嬉しかったのだ。

正直、それだけで十分だと思っていた。この悔しさをバネにして、次はもっと面白いものを書いてやろうと。しかし我一人で気付けないことを指摘してくれるというのならば、これ程ありがたいことはない」

一色の提案を受ける意志があることを告げた。

「無論、彼女が提案してくれたことは無駄にしない。できるだけ読みやすい文章を書けるように精進するつもりだ」

結論がどうなっても日記は書くつもりであるらしい。

「あなたの意見はよく分かったわ。比企谷君はどうかしら？」

「そういうのは部長が決めるべきなんじゃないか？」

「私はこういうの、あまり詳しくないから。ある程度知っていそうなあなたの意見がほしいわ」

「……確かに雪ノ下の意見にも一理ある。甘やかし過ぎては材木座のためにならない。問題はどこまでをやり過ぎとするかだ」

それを判断するには、今回の依頼内容を整理する必要があるだろう。

「材木座の依頼は『小説の原稿を読んで感想を言うこと』だ。だが材木座の目的はそこではない。材木座の目的は作家になるということだ。そのために新人賞に応募する小説を書いて、俺たちに感想を求めて改善しようとした」

自身の承認欲求を満たすといった考えもあるだろうが、材木座が第一に定めているのはそれだ。

「俺たちが感想を言ったことで、どこが読み辛いのか。何が悪いのかは明確になった。材木座も改善するように努力することはできるだろう。

しかしそれを客観的に見て判断することは難しい。自分で読んで問題がないから、あのやたらと難しい漢字がびっしりと詰まった文章ができあがるんだろう」

難しい漢字を使いたがっているというのもあるだろうから、意識すれば多少は改善できるだろうけどな。

「また人に自分の文章を見せるっていうのは、適度な緊張感が伴う。読みやすい文章を書こうという意識もしやすいだろう。それに今日のような長文をまとめて持ってこられても、修正する箇所が多すぎて、修正する俺たちもそれを受ける材木座も負担が大きくなる」

修正箇所が多いということは、修正箇所一つに対する注意が薄まる。

どれを優先的に修正すればよいのか分からなくなってしまう。

「最後に、作家になるという目的を達成するのに最も必要とされるのは物語の面白さやセンスだ。それは材木座が本気で作家を目指すのならば必ず身に着けなければならないものだ」

その部分は俺たちにはどうすることもできない。

「材木座が力を注ぐべきはそこで、その前段階である『読みやすい文章を書けるようにすること』を手伝うのは問題ないんじゃないか？」

結論を述べる。

やたらと長く喋ってしまった。
「とまあ色々と理由をつけてみたが、最後にはどうやったって裁量になる。雪ノ下、判断はお前に任せる」
「比企谷君」
「なんだよ」
「ありがとう。よく、分かったわ」
「お、おう」
雪ノ下に素直にお礼を言われると何故か調子が狂う。
「由比ヶ浜さんはどうかしら？」
「あたし!?　あ、あたしは……そんなに詳しくないし。ゆきのんよりもちゃんと判断できるわけでもないし」
人には向き不向きがある。
この依頼に関しては、由比ヶ浜の活躍できる場はほとんどないだろう。
だがその分、他の依頼で俺や雪ノ下にできないことをすれば良い。
また、良く知らないからこそ核心をついた発言をできるかもしれない。
「お前も一応部員だから意見を求めているだけで。さっきも言った通り、最終的な判断は雪ノ下が下すからそこまで気負うことはない」

「で、でもさ……」
それでも躊躇している由比ヶ浜。
やはり、自分だけ原稿を読んでこなかった罪悪感があるのだろうか。
ここは由比ヶ浜抜きで話を進めるべきかと諦めかけた時、
「私は――」
一色が声をあげた。
その声は静かな部室にすうっと通る。
由比ヶ浜は顔をあげ、一色と向き合った。
「私は、結衣先輩がどうしたいのか知りたいです」
どこまでも真剣な表情で、自身の想いを告げる一色。
「教えてもらえませんか？」
「……」
一色の『お願い』に、由比ヶ浜は唇を固く引き結んでから応えた。
「中二ががんばるって言うなら、手伝ってもいいと思う。あたしじゃ、役に立たないかもしれないけど……」
「結衣先輩、ありがとうございます！」
「ありがとう、由比ヶ浜さん。よく分かったわ」

雪ノ下は一度目を閉じる。
その上でふと表情を緩めると、
「結論を述べます。私たちは奉仕部としてできる限りの支援をします。ただし、それは正しい文法を身に付けるという点に関してのみ。作家としてのセンスを磨くのは、あなたの仕事になるわ。それで構わないかしら？」
「う、うむ。御助力、有難く承る」
「その喋り方……まあ、いいかしら」
そう言って雪ノ下は笑う。
こいつの笑顔を見たのはもしかしたら初めてかもしれない。
材木座は瞳に涙を溜めて、心底嬉しそうにこう言った。
「……八幡。友とは、良いものだな……」
「え、お前友達いたの？」
「はちまああああああん……！」

◆

「ただいまー……」

誰もいない家に向かって少女は言った。
当然、誰からの反応もない。
少女は無造作に扉を開閉させ、ソファに寝転がる。
そのまま仰向けに倒れて、変わり映えしない天井をぼーっと眺めた。
「……はあ」
自然とため息が漏れる。
次いで取り出したのは、折り目のほとんど付いていない紙束だ。
頁を捲り、何度か目を通す。
しかし彼女には、どれほど時間を掛けようとも、その紙束に書き込まれている内容を理解することはできなかった。
『私は、結衣先輩がどうしたいのか知りたいです』
放課後の部室で投げかけられた言葉を反芻する。
ぽとんと。
手元の紙束ごと、右手はだらんとソファの上に落ちる。
何度かバウンドした後、やがて動かなくなった。
「……このままじゃ、駄目だよね」
少女はポケットからケータイを取り出して、11桁の数字を入力した。

そして――。

きっと、負けたくないのは彼女だけではない。

「じゃあお前ら、好きなやつとペア組めー」

体育のテニスの授業が始まった途端、体育教師の無慈悲な宣告がなされた。

「あの、俺あんまり調子良くないんで壁打ちしてていいですか？　迷惑かけたくないんで」

返事を待たず壁打ちを始めると、教師も声をかけるタイミングを見失ったのか何も言わなかった。

完璧すぎる……。

体調が悪い＋迷惑をかけたくないの相乗効果が効いている。

且つ体育自体のやる気があることは示している。

これぞ長年のぼっち生活により培われた好きな人とペア組め対策。

あとで材木座にも教えてあげよう。

泣いて喜ぶぞ、あいつ。

そんなこんなで一人で壁打ちに集中していると、ころころとボールが転がってくる。

「やっべ、え、えーと……。ひ、ヒキタニくん、ボールとってくんね？」

誰だよヒキタニくん。
訂正するのもめんどうだったので、俺はボールを拾って軽く打ち返す。
「っべー。ヒキタニくん、今のやばくね？　魔球じゃね？　隼人くんの手に吸い込まれてったべ？　っべー」
そりゃ、そこ目がけて打ったからな。
お前に言わせれば何でも魔球だろうよ……。

昼休み。
いつものベストプレイスで昼食を食べる。
ここで食べると風が気持ち良くて、ごはんがおいしくなるからね。
決してぼっち飯とかじゃないよ。
「あれ、せんぱい？」
「一色か？」
「せんぱいこんなところで何……あっ」
察するなよ、悲しくなってきちゃうだろ。
「冗談です」
そう言いつつ、俺の隣に腰かける。

「良い場所ですねー。風がきもちーです」
「だろ？　飯を食うならここに限る。というかお前なんでここにいんの？」
「……罰ゲームです」
「俺と話すことがですか」
「違いますよ。ジュース買ってくるやつです。パシリですね」
なんだーよかったー。
うっかり死んじゃうところだったわ。
「今日は結衣先輩がやけに調子良くてですね……」
雪ノ下そっくりの物真似をしつつ、罰ゲームに至るまでの顛末を話す一色。
途中までは楽しそうだったのだが、罰ゲームの内容に入ると声のトーンが落ちていき、
「次は勝ちます。完膚なきまでに叩きのめします。フフフ……」
「だからこわいっての」
瞳のハイライトさん、戻ってきて！
勝利への異常な執着を見せる一色に若干引きながらも、残りの昼食の消化を進める。
「でも、今日だけは負けてよかったですね」
「なんでだよ」

するりと。
ほんのわずかだけ距離を詰める一色。
ふわりと、脳をとろかすくらいに甘い香りがした。
「こうして、せんぱいと二人きりになれましたし」
「……っ！　こほ、ごほっ」
そんなこんなで一色と二人で話し込んでいると、突然ボールが転がってきた。
「ごめんなさーい！」
そのテニスボールは俺の足元で止まった。
俺は仕方がないのでボールを拾い、近くまで来ていた生徒に投げ渡す。
「あ、比企谷くんだ。ボール、ありがとうね」
「お、おう」
「比企谷くんっていつもここでお昼ご飯食べているの？」
「ま、まあな」
冷や汗をかきながら返事をする。
視線は常に斜め上だ。
「……せんぱい、せんぱい。あのヒト誰ですか」
「……いや、実は俺も分からん」

「……あー、あれですか。元クラスメイトとかで向こうは認識しているけどこっちは名前すら分からない、あの。よく分かります」

分かっちゃうんだ。

雪ノ下や由比ヶ浜あたりだったら引いているところだぞ。

特に雪ノ下は記憶力が異常に高く、礼節を重んじるところがある。

「あ、あはは。やっぱりぼくの名前覚えてないよね。同じクラスの戸塚彩加です」

「わ、悪い……クラス替えからあまり時間経ってないから、ほら、こうね」

「一年の時も同じクラスだったんだけどね……。ぼく、影薄いから」

「やー、そんなことないぞ？　ほら、俺あんまりクラスの女子と関わりないからさ。むしろ女子と喋ったのが数年ぶりまである」

「……私は女子ではないと」

「……いいからここは抑えてくれ、な？」

「……貸し、一個ですからね」

あとで何を要求されるのか戦々恐々とするが、今はこの場を切り抜けるのが先だ。

「……でも、まさかこんなところに伏兵がいるとは」

「……なんだよ伏兵って」

「……もちろん恋敵です」

口に何も入っていないのにむせかけた。
なんなの？
こいつ俺をむせころさしちゃう気なの？
だとしたら実に有効な手段であると言わざるを得ない……。
「大体、クラスでぼっちで休み時間もイヤホンつけて音楽聞きながらうつ伏せで寝たふりするようなせんぱいに話しかけるメリットがありません。絶対せんぱいに気がありますよ」
「……根拠は？」
「ラノベです」
「駄目じゃねーか」
「えー何でですか？」
最近渡したラノベで似たようなシチュエーションがあったので、聞いてみたら案の定だった。
ダメだしすると、ものっそい不満そうな顔をしている。
ちょっと毒されすぎじゃないですかね。
「ぼく、男なんだけどな……。そんなに弱そうに見えるかな？」
『は？』

ぴたっと、俺と一色の思考と動きが停止した。
先に再起動を果たしたのは一色だった。
「なるほど、これが噂の男の娘というやつですか。要注意ですね」
「順応早いなおい……」
俺は気まずさをごまかすため、戸塚に話題を振った。
「しかし、昼休みにも練習か？　大変だな」
「うん。うちの部はすっごく弱いから……お昼も練習しないと。お昼も使わせてくださいってずっとお願いしてて、最近やっと許可が出たんだ。比企谷くんと……」
「一色いろはです」
「一色さんはここで何してるの？」
「もちろん逢引を」
「おい」
「え……お邪魔だったかな？」
真顔の一色の発言に、戸塚がおろおろとし出す。
見ろよ、信じちゃったじゃねーか。
「冗談だからな」
「そっか。なら良かった」

ほっと薄い胸を撫で下ろす戸塚。
しかし何度見ても、男女共通の服装をしていると女子にしか見えないな。
「あ、そういえば比企谷くんってテニスうまいよね。もしかして経験者？」
「いや小学生の頃、マリオテニスをやって以来だ。リアルではやったことない」
「私テレサ超好きです」
「お、奇遇だな。俺も好きだ」
「……せんぱい、今のもう一回お願いします」
「……俺もテレサ好きだぞ。あのぬるぬるした動きがな」
「……おしい、録音しておけばよかったですー」
録音して何に使う気なんですかね。
一応、声量を小さくして戸塚には聞こえないように配慮していたので、俺は某ラノベ主人公の如く最後のは聞こえなかったことにした。
するとタイミングよく昼休み終了を告げる鐘の音が鳴る。
「わ、片付け急がないと。じゃあね比企谷くん、一色さん」
「お、おう。おつかれ」
「さよならですー。せんぱいもほら、戻らないと遅刻しちゃいますよ」
「それはそうだが、一色」

「は、はいっ」
何故かビシッと背筋を伸ばす一色。
「罰ゲームはいいのか？」
「あっ」

そして数日後。
再び体育の時間がやってきた。
度重なる一人壁打ちの結果、今や俺の壁打ちスキルはさらなる高みへと至りつつあった。
体力の消耗を避けるため、一歩も動かずにボールを打ち返せるようになったのだ。
手〇ゾーン！
脳内でアホな妄想をしていると、その直後に打球があらぬ方向に飛んでいってしまう。
さすがに壁とのラリーでは回転を制御してなんちゃらするのは難しかったようだ。
ボールはまだたくさんあるので、転がっていったボールの処理は魔球開発をエンジョイしているやつらに任せた。
そうして再びボールを拾った瞬間、とんとんと肩が叩かれる。

「あははっ、ひっかかった」
　えー嘘何この気持ち。
　一色の言っていた男の娘ヒロイン説が現実味を帯びてきちゃったよ。
　このまま戸塚ルートに突入しちゃう勢い。
「どした？」
「今日さ、いつもペア組んでる子がお休みなんだ。だから、よかったらぼくと……やらない？」
　だからその上目遣いやめろって。
　一色のようなわざとらしさが感じられないから破壊力がヤバい。
「ああいいよ。俺も一人だしな」
　壁よ、今まで世話になったな。
　お前との熱いラリーの応酬、忘れないぜ。
　心の中で壁に別れを告げ、戸塚とのラリー練習が始まった。
「やっぱり比企谷くん、上手だねー」
「超壁打ってたからなー。テニスは極めたまであるー」
「それはスカッシュだよー。テニスじゃないよー」
　緩い会話をしつつ、ラリーを続ける。

テニス部である戸塚は言わずもがな、スカッシュを極めた俺のコントロールもそこそこ良い。
他の連中がミス打ちを続ける中、俺たちだけが長いことラリーを続けていた。
ボールを拾いにいかなくていいから楽だなあ。
そんなことを思いつつ打球を返すと軌道がずれて、ついにラリーが途切れる。
雑念が入るとダメだな。
「少し、休憩しよっか」
「おう」
戸塚の提案により二人してベンチに座る。
しかし、ちょっと近くないですかね？
ほぼ拳一個分しか空いていないですよ？
電車で両脇が空いていないと座れない俺にこの距離はつらい。
「あのね、ちょっと比企谷くんに相談があるんだけど……」
「相談？」
「うちのテニス部のことなんだけど、すっごく弱いんだ。人数も少ないし、三年が引退したらもっと弱くなると思う」
「なるほど」

「それで。比企谷くんさえ良ければ、テニス部に入ってくれないかな？」
「……は？」

そして、放課後。
「無理ね」
「即答かよ。一応理由を聞いてもいいか？」
「無理なものは無理よ。だって、まだ依頼が終わっていないもの」
曖昧な言い方をする雪ノ下。
「いや、依頼ってなんだよ。戸塚のこととは関係……」
そこでようやく雪ノ下の言いたいことに思い至る。
気付いたときにはもう遅かった。
「一色さんの依頼のことよ」
雪ノ下は慈愛に満ちた笑みで続ける。
「もっとシンプルに言うわ。あなたが奉仕部を退部したら、一色さんが悲しむじゃない」
「いや、悲しむって……あいつなら俺が奉仕部を抜ければ追いかけてくるんじゃないか？」
我ながら自惚れも甚だしい考えだ。

だがとりあえず乗っておかないと話が進まない。
「私が付けた条件を忘れたの？　合わないと思った方が意思表示をする。その方法の一つに奉仕部から出ていくというものがあるわ。だからあなたが出ていった時点で一色さんはあなたに拒絶されたと判断するでしょうね」
「……」
「どうせあなたのことだから『テニス部に入ると見せかけてそっちも徐々にフェードアウトしていこう』とか考えているのでしょうけど」
「そ、そそそんなこと考えていませんよ？」
「冗談よ。本当は私にこのことを話して、遠回しに依頼をしたかったのでしょう？」
どんだけ好意的な解釈だよ。
本当にこいつ雪ノ下か？
何か別なの入ってないだろうな。
「奉仕部でどうにかできないか。それは無理でも何かしらのヒントを得られないか。それを聞きたくて話した。違う？」
「違うな。俺は別に放課後の自由な時間を得たいがために……」
「これが一色さんのいう捻デレというやつね。よく分かったわ」
一色さん？

一体俺がいないときにどんなことを話してくれやがっているんでしょう？

「もっとも、あなたという共通の敵を得て部員が一致団結することはあるかもしれないわね。けれど排除するための努力をするだけで、自身の向上に向けられることはないの。だから解決にはならないわ。ソースは私」

「なるほどなぁ。……ソース？」

「私帰国子女なの。当然転入という形になるのだけど、クラスの女子は私を排除しようと躍起になったわ。でも誰一人として私に負けないように自分を高める努力をした人はいなかった。……あの低能ども」

うわあ。

雪ノ下の闇の部分に触れてしまった気分だ。

普段の俺のゴミを見るような目の数倍冷たい目をしている。

「じゃあそれは無しとしてだ。他に良い案はあるか？」

「そうね……。やる気のない人にやる気を出させるのは至難の業よ。特にスポーツ系の部活動はスポーツそのものが好きでないと、続けることは難しいわ。上達には時間がかかるし、タイムリミットもある。その上結果が出るとは限らない。また閉じられたコミュニティだからこそ、周囲のやる気のなさが伝染しやすいのかもしれないわね」

なるほど。

スポーツ自体を好きになること。
どんな結果が得られるか示すこと。
やる気のない人を排除すること。
ここら辺がポイントか。
「結果が出るっていうのは分かりやすくていいな。勝つことは難しくても、スポーツやってて得られるものといえば、推薦や就職で有利になることか？」
「多少は有利になるかもしれないけれど、それは3年間続けたという肩書さえあれば十分ね」
「大会、賞、団体戦……。一応戸塚が強くなればそのメリットも強化される、のか？」
「トップがやる気があって、なおかつ実力もあれば、ある程度は。もっとも、空回ってしまっては逆効果だけど」
「そこで空回っているって思っちゃうやつはもうダメだろ。そういうやつらは全員抜けたって新しい部員を補充した方がいい。それが一番難しいんだろうけどな」
二人で色々と考えていると、ふと雪ノ下の視線がこちらに向いていることに気付いた。
「がんばるのね」
その生暖かい目でこちらを見てくるのはやめてもらえませんかね？

「まあ、あれだ……人に相談されたのは初めてだったんでな」
「私は良く恋愛相談とかされたけどね」
　雪ノ下は張り合うように言う。
「といっても、女子の恋愛相談って基本的には牽制のために行われるのよね……」
「は？　どういうこと？」
「自分の好きな人を言えば周囲は気を使うでしょう？　聞いた上で手を出そうものなら泥棒猫扱いで女子の輪から外されるし、なんなら向こうから告白してきても外されるのよ？」
「理不尽だな……ん？」
　そこで先日の出来事に思い至る。
「じゃあ、一色のあれは牽制か？」
「……どうかしら？　少なくともいつもの恋愛相談のような、嫌な感じはしなかったのだけれど」
　雪ノ下は少し考え込む。
「本当の所は本人に聞くしかないけれど。自分の覚悟を決めるため、とか……そういったところかしらね？」
「まあ、参考になったわ。お前にも分からんことがあるって訳だな」

「そうね。特に一色さんや由比ヶ浜さんのことは、よく分からないわ」
「一色はともかく、由比ヶ浜は単純だろ」
「そうかしら？　私には、彼女は私なんかより色々なことを考えているように見えるわ。同じ生き方は、できそうにないわね」
「そりゃそうだろ。お前は由比ヶ浜じゃないしな」
「それもそうね」
　儚げに笑う雪ノ下のことが気になりつつ、なんと声をかけたものかと悩んでいると、ちょうどいいタイミングで部室のドアが勢いよく開かれた。
「やっはろー！　今日は依頼人を連れてきたよ！」
「きましたー」
　間延びした声の一色が続く。
「依頼人？　一色がか？」
「違う違う。ほら、彩ちゃんどうぞ」
「お？」
　二人に続いて顔を出したのは戸塚だった。
　午後の体育振りだ。
　遠慮がちに入室する戸塚を、一色が『戸塚先輩、遠慮せずにどうぞ』と促す。

「ありがとう、一色さんに由比ヶ浜さん」
二人に笑いかけながら戸塚がそう言った。
何、いつの間に仲良くなってるのん？
「お前無駄にコミュ力高いな……」
「あー。まあ普段は人間関係なんてくそく……どうでもいいんですけど、せんぱいのお友達ということで近づいておいて損はないかなと」
なん、だと……？
俺の数少ないコミュニティが一色に侵食されていく。
外堀からどんどん埋められている気分だ。
材木座もあれから毎日日記を見せにきては、一色のこと師匠とか呼び始めたし。
いや別に、友だちって訳じゃないですけどね。
あと一色の性格的に、妹の小町と会わせるのだけは避けたいなぁ。
でも無理そうだなぁ。
嫌だなぁ。
「で、戸塚彩加君だったかしら？　何かご用？」
「えと……テニスを強く、してくれる、んだよね……？」
「由比ヶ浜さんに一色さんがどんな説明をしたのか知らないけれど、奉仕部は便利屋で

はないわ。強くなるかならないかはあなた次第よ」
「そう、なんだ……」
「でも手伝いはするんですよね？」
「そうね。その上で自立を促すだけ。だから、過剰に期待させるような説明をするのは控えてもらえるかしら？」
「ん、んんっ？　でもさー、ゆきのんとヒッキーにいろはちゃんならなんとかできるでしょ？」
「……あなたも言うようになったわね。そこの男はともかく、私を試すような発言をするなんて」
「……私も本気を出しますよ」
　由比ヶ浜の一言で、冗談の通じないお二方に変なスイッチが入ってしまった。
「いいでしょう。依頼を受けるわ。あなたの技術向上を助ければいいのよね」
「はい。ボクが上手くなれば、みんな一緒にがんばってくれる……と思う」
「で、どうやんだよ」
「一先ず、トップのやる気だけは十分よ。ならば……」
　やる気があるのなら、あとは実力を付けるのみ。
　雪ノ下は酷薄な笑みを浮かべた。

「死ぬまで走ってから死ぬまで素振り、死ぬまで練習をしましょう」
どうしてそんなに残酷なことを笑顔で言えるのか不思議でしょうがない。
当事者である戸塚はもちろんのこと、俺たちは全員が例外なく怯えた。

そして、次の日の昼休み。
前日はあんな恐ろしいことを言っていた雪ノ下だが、当然無理のあるメニューはこなさない。
まずは基礎体力をつけるためのランニングや筋トレを中心に行うようだ。
昼休みの僅かな時間であるため、雪ノ下基準で「死ぬまで」やらせてもそこまで問題はなかった。
トレーニングのメニューも、体全体に負荷がかかるようにしている。
また、戸塚の筋力はほとんどなく、腕立ても数回しかできないことが分かった。
それからは膝をつけて腕立てをさせたり、気合だけでどうにかさせようとはしない。
だからと言って雪ノ下が甘いというわけではないのだが。
「なんというか、大人しいんだな」
「？」
そんな雪ノ下を黙って見ている一色に話しかける。

一色は頭に疑問符を浮かべて、かわいく首を傾げた。
首の角度が計算され尽くしている、あざとい。
「開始前は『本気出します』とか『絶対勝ちます』とか言ってたからな。もっと張り合うもんだと」
「すでにスケジュールが組まれていましたからね。これでやり過ぎているところがあれば遠慮なく突っ込もうと思ってましたけど」
つまり一色の目から見てもこのトレーニングは妥当ということか。
口を出すところがない。
ならそれは雪ノ下の勝ちということにはならないのだろうか？
「だから私は私にできるところで勝負します」
そう言って自信満々に、一色は鞄の中からタッパーを取り出す。
「じゃん。定番のはちみつレモンです」
「おお……うまそうだな」
タッパーを開くとそこには黄金色に輝くはちみつと輪切りにされたレモンがあった。
これこそザ・部活のマネージャーの差し入れ、定番中の定番だな。
程良く疲労の溜まった体が、蜂蜜の甘さとレモンの酸味を求めている。
「はい、せんぱいもどうぞ」

「おう、ありがとな」
手を伸ばす。
あと少しでレモンに刺さった爪楊枝に手が届く寸前、タッパーが隠される。
「……なんだよ」
一色は意地の悪そうな笑みを浮かべて、そのうちの一つを取った。
そのまま俺の口元に近づけて、
「せんぱい、あーん」
「ちょっと待て」
「あーん」
「い、一色さん？」
「……あーん」
「落ち着け。自分で食べれるから」
「焦らさないでください……垂れてきちゃいますよ」
一色の言うとおり、はちみつはすでに垂れて一色の手にくっついてしまっている。
爪楊枝でかろうじて支えられているレモンごと落ちてしまいそうだった。
少しだけ躊躇して、雪ノ下や由比ヶ浜が見ていないことを確認してからパッと食べる。

「せんぱいにべとべとにされました」
「誤解を生むような発言は止めてね？」
「あ、せんぱい汗かいてますよ」
「誰のせいだ誰の」
「じゃあ責任とって私が拭いてあげます♪」
水に濡れたタオルの冷たさは心地良いが、それ以上に恥ずかしすぎる。
わしゃわしゃと顔全体を拭く一色の手に遠慮はなく、おかげで肌に張りついた汗もしっかりと取れたのだが。
「はい、綺麗になりましたよ」
「……ありがとな」
「どうですか、私の本気は？　……惚れました？」
惚れたかどうかはともかく、ちょっぴりときめいてしまった。
マネージャーが一色なら運動部に入ってもいいなと考えてしまった。
実際はもろもろの理由で帰宅部が最強過ぎるのでそんな選択は取らないが。
答えは求めていなかったようで、俺が固まっているのを満足そうに確認した一色は戸塚たちにもはちみつレモンを配りにいく。
そんなこんなで日々が過ぎ、俺たちの修行は第二フェイズへ移行した。

かっこつけて言ったが要するに基礎訓練が一通り終わり、ボールとラケットを使った練習に入ったのだ。
素振りをしたり、壁打ちをしたり、投げたボールを打ち返したり。
「由比ヶ浜さん。もっと厳しいコースにボールを投げなさい。それじゃ練習にならないわ」
雪ノ下は相変わらず鬼だった。
由比ヶ浜も真に受けて、コントロールもないので時折あらぬ方向にボールが飛ぶ。
それにも食らいついているうち、戸塚は足元を滑らせて転んでしまった。
「うわ、彩ちゃんだいじょぶ!?」
「大丈夫だから、続けて」
膝を擦りむきながらも、立ち上がる戸塚。
健気だ。
「まだ、やるつもりなの？」
「うん。みんな付き合ってくれるから、もう少し頑張りたい」
「そ。じゃあ由比ヶ浜さん、後は頼むわね」
そういってコートを去っていく雪ノ下。
「なんか、いつまでたってもうまくならないし、呆れられちゃったかな」

「それはないと思うよ。ゆきのん、頼ってくる人を見捨てたりしないもん」
「まあ、お前の料理に付き合うくらいだからな」
「どういう意味だ！」
「あー、テニスしてんじゃん、テニス！」
そう声をかけてきたのは、同じクラスのザ・リア充葉山隼人と愉快な仲間たちだった。
「ね、戸塚ー。あーしらもここで遊んでいい？」
「三浦さん、ぼくたちは別に、遊んでいる訳じゃ……」
「え、何？　聞こえないんだけど」
「あー。ここは戸塚が許可取って使ってるものだから、他の人は無理なんだ」
「はあ？　あんたも使ってんじゃん」
「俺らは部活動の一環として練習に付き合ってんだよ」
「じゃああーしらも手伝うなら良くない？」
お前はただ遊びたいだけじゃねーか。
というツッコミは抑えつつ、平和的解決法を模索する。
しかし、何も思いつかなかった。
黙っている俺に焦れたのか、三浦はラケットを持ってボールを打ってきた。
「ねえ隼人。いい加減あーしテニスしたいんですけど」

「じゃあこうしよう。部外者同士、俺とヒキタニ君で勝負する。勝った方が今後休みはここを使えるってことで」
「ええと……」
「もちろん練習にも付き合う。強いやつと練習した方が戸塚のためにもなるし。みんな楽しめる」
たしかに俺たちはあくまで部外者だ。
文字通り戸塚はテニス部で、俺たちは奉仕部である。
そして俺たちにテニスの経験者はいない。
ある程度技量のある人間と練習した方が、戸塚のためにもいいだろう。
隙のない構えだ。
思わず納得して頷きかける。
しかし、そう思わなかったやつもいた。
「何それ超楽し」
「何言っているんですか」
ちょこんと。
控えめに手をあげた一色が、
仕草こそ控えめだったが、その言葉には有無を言わさぬ強制力があった。

「はあ？」
水を差された三浦は、露骨に不機嫌になる。
その威圧感たるや葉山オーラに導かれてコートの周りに集まりかけていた野次馬が身を引くほど。
しかし一色は動じなかった。
「練習にも付き合う、ですか？」
「あ、ああ。もちろん真面目にやる。戸塚の練習になるようにするつもりだ」
「つもり、ですか。それっていつまでですかね？」
「え、ええと……」
「みんなって誰ですか。そこにいる仲良しグループ全員ですか？」
一色の視線は葉山の後ろに隠れていた男子三人と女子一人に向かう。
その４人は葉山グループであってもほぼ傍観者だ。
案の定、一色に視線を向けられても、ただ目線を逸らすことしかしない。
「私たち４人は同じ部活のグループです。そして、戸塚先輩から練習を手伝ってほしいと依頼を受けたので手伝っています。戸塚先輩はもちろんのこと、私たちも部活動の正式な活動をしているんです。部外者はあなたたちだけですよ？」
「はぁ？　何訳わかんないこと……」

「楽しそうだからって理由でコートを使いたいそうですが。他の人もそこの女がやるって言ったからなんとなくついてきたんですよね。そんな義務も義理もない彼らが、ずっと戸塚先輩を手伝うんですか？」

一色の質問に答える人は誰もいなかった。

つまりはそういうことなのだろう。

「せんぱいは優しくて義理固いですから、手伝うと言ったあなた達を無条件で信じましたけど。私はそうではありません」

そんな大層なもんじゃない。

あくまで俺たちも部外者であるという意識が強かっただけだ。

だから何も疑問に持てなかった。

「楽しそう、面白そう、遊びたい。あまりに無責任過ぎやしませんかね？　そんな理由でコートを使おうとしたあなた達を信じることはできません」

「ちょっとくらい別に……」

「繰り返しますけど、許可を取ったのは戸塚先輩です。戸塚先輩はテニス部の部長という、責任の伴う立場にあります。その戸塚先輩がテニスの練習をするために使うというから、学校側は許可を与えたんです」

すでに一色は三浦を見ていなかった。

「同じ運動部の部長として、それがどれほど大変かは分かりますね？　葉山隼人先輩」
矛先を向けられた葉山は、無言で頷いて同意を示す。
「優美子。俺が間違っていた。彼女の言う通りだ。ここは出直そう」
「は、隼人が謝ること……。大体あんた一年でしょ？　さっきから生意気なんだけど」
「年齢は関係ありません。それに尊敬に値する人ならば、きちんと敬いますよ」
「これ以上は無理っしょ～……俺たちは校庭で遊ぼうぜ？　そだ、バレーボールとかどう？　優美子めっちゃうまかったじゃん」
三浦の肩に手を当て、首を振る葉山。
一色との間に入って校庭にいくことを提案する茶髪ロンゲ。
二人掛かりで、やんわりと抑えにかかる。
しかし女王様である三浦は自分が悪いという事実に耐えられない。
ちっぽけなプライドが、自分の過ちを認めることを許さない。
「だ、だいたいさ、ゆいはどっちの味方なのよ」
次に三浦が矛先を向けたのは由比ヶ浜だった。
それでいいのか、三浦。
形勢は苦しくて、味方はもう誰もいない。
だから感情に任せて言っている部分もあるだろう。

けど、それの返答次第ではお前の仲良しグループは簡単に壊れるぞ。
俺は別に、こいつらがどうなろうと知ったこっちゃない。
知ったこっちゃないが……俺の見ているところでやられると気分が悪い。
時折、クラスのグループが喧嘩して空気が悪くなることある。
あれ、ぼっちには関係ないと思うかもしれないが、ただでさえ居心地の悪い教室がさらに息苦しくなるんだぜ。
だから俺は、内輪ノリも内輪揉めも大嫌いだ。
『これからも仲良く、できるかな？』
『ふーん。そ。ま、いいんじゃない？』
少し前のクラス内のいざこざが、脳内に反芻される。
三浦と由比ヶ浜がちょっとしたことで険悪になり。
最終的に由比ヶ浜が歩み寄る形で解決した。
今回も同じだ。
また同じことを繰り返すのか？
そう、するんじゃなかったのかよ。
「おい、三浦」
「は？　あんたには関係ないでしょ。少し黙ってて」

「う……いや、黙らん」
「はあ？」
とは言ったものの、どうする？
話題を逸らすか？
それだと根本的な解決にはならないな。
そのまま、思ったままを伝えるか？
さらに意固地になる可能性もある。
「いいの、ヒッキー」
迷っているうちに、由比ヶ浜が前に出る。
……なんでだよ。
どうしてお前は前に出れるんだ。
「優美子」
薄っぺらで。
嘘ばっかりで。
すぐにでも壊れてしまいそうな関係性のために、どうしてお前が傷付かなくちゃならないんだ。
「あたしね、部活が大事」

由比ヶ浜ははっきりとそう言った。
三浦に瞳に戸惑いが宿る。
やがて、それは明確な敵意に変わっていく。
爆発した感情は、止まらない。
そうして、決定的な決別の一言が告げられる。
息を吸いこんで、瞳に溜まった涙を無視して、喉が震えて。
その寸前のこと、由比ヶ浜は「でも」と続けた。
「でもね。優美子も大事！」
「……え？」
「部活も大事だし、優美子も大事。だからあたしは、どっちもの味方！」
「な、何それ。どっちもの味方とか、ないじゃん。あーしら追い出すって、そういう話……でしょ」
気が強そうに見えても、案外それは外面だけなのかもしれない。
由比ヶ浜は不安そうにしている三浦の手を取った。
「今回は、優美子がちゃんと彩ちゃんの手伝いをするっていうなら、あたしからもみんなに言う」
「あ、あーしは……」

「まずは学校に許可をもらいにいこう！　それがいろはちゃんの通してほしいスジコ？　みたいなやつなんだと思う。平塚先生に言えばなんとかしてくれる……と思う。たぶん！」

根拠のない自信に満ちた声で由比ヶ浜が告げる。

それと、通してほしいのは筋な。

魚卵を通してどうする。

「ほら優美子、いこ？　早く早く！」

「ちょ、ゆい待って……。自分で歩けるから」

由比ヶ浜は三浦の背中に手を当て、コートから押し出していく。

三浦はそれに流されるまま、二人は職員室へと向かって行った。

ふと背後から視線を感じて振り向くと、そこにはにこにことした笑みを浮かべた一色がいた。

するりと、隣に寄り添うように並んだ一色は、だんだんと小さくなっていく二人の影をしばらく眺めていた。

やがて二人の姿が完全に見えなくなると、ぽしょりとこう言う。

「何も心配すること、なかったですね」

「ばっかお前。俺は別に心配なんてしてないですし」

「あれ、せんぱい心配してたんですか？　じゃあ、私と同じですね」
「……」
……謀られた。
さっきのは一色の独り言だったのだろう。
それに反応してしまった時点で、俺の負けである。
「せんぱいのそういうところ、大好きですよ」

この、少し後のこと。
毎週水曜の昼休みに、実戦形式の練習がテニスコートで行われることになるのだが。
それはまた別の話である。